白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

中高校生　小説の部　優秀賞

「～気づき～「目標」と「努力」」

鶴来中学校二年　金谷（かねや）　光優（みゆ）

「あ〜疲れた。学校とかほんとに面倒くさいんですけど。そんなことよりスマホでも見よっと。」
　私、影川依夢（かげかわいむ）はいつものようにスマホを見ていた。
「あ、新しい動画出てんじゃん。これでも見るかぁ。」
「やっぱ面白すぎるでしょ！てかもう推しの配信の時間じゃん！やば。楽しみすぎるんですけど。」
「ちょっと依夢！もう夕ご飯だから降りてきて！早くしないと冷めるから。」
「わかったー。」
　うるさいなあ。そんな大きい声出さなくてもいいじゃんか。それに配信も始まりそうだったっていうのにさ。ほんとに最悪…。
　ご飯を食べてる最中、お母さんから質問攻めにあった。
「あんたいい加減友達の一人もいないの？もう中学校入って二年目でしょ？少しぐらい話してくれたっていいじゃない。」
「それに宿題とか勉強もちゃんとしてる？去年の成績散々だったじゃない。次のテストの点が悪かったらスマホ取り上げるからね。」
「ちょっと！それはやめてよ！さすがにスマホなかったら無理だって！」
「大体あんた昔は元気に外で遊ぶようなかわいらしい子だったのに、中学生になるころには家から出ずにネットばっかり。そんなことしてたら目も悪くなるし、将来働けなくなって生活に困るのはあんた自身なんだからね。」
「そんなに言わなくてもいいじゃんか！お母さんだって昔は勉強できなかったって言ってたじゃん！」
「それで実際に困ったから今こうやって教えてあげてるの。」
「そんなこと言ったってさ！」
　その後も言い合いばっかりして、ご飯の味なんかちっとも頭に入らなかった。お母さんの言ってたことも忘れちゃったし。ま、そんな嫌なこと考えてるより推しのこと考えたほうがいいに決まってる！早く戻って配信の続き見ないと！
「うわ、配信見てたら二十二時になってるじゃん…。てか宿題やってないから早くして寝ないと。」
　結局寝るころには二十三時になってた。明日もお母さんに起こされるのかな。あ〜学校行きたくない。
　そんなつまんない日々が、ずっと続いていた。

　またいつものようにスマホを見てたら広告が出てきた。
〈無料！あなたの隠れた属性診断！今すぐチェック！〉
　ふーん。なんか面白そうだなぁ。どうせ無料なら少しぐらいやったっていいよね。今までにも何回もやったことあるし。性別と誕生月を打ってっと…。
　いろんなことを入力した後に出てきたのは『闇属性』だった。
「え〜闇属性？そんなに私って暗いかなぁ？」
〈あなたにおすすめのスポットはこちら！〉
　そこには〝ダークカルデラ島〟という地名が書いてあった。知らない島だなぁ。そんなのどこにあるんだろう？
　そう思ったとき、スマホから音声が聞こえてきた。
《転送を開始します》
　え？転送？どゆこと？
　次の瞬間、スマホから円柱状の光が出てきて、私はそれに吸い込まれるように体が動いた。点滅している光に包まれて、身動きも取れなくなった。
　やば……ほんとに動けないんだけど。助けてって言おうとしても声も出ない…！やばいやばいやばい！なんかもうやばいしか出てこない！でもなんにもできないし大人しくするしかないの!?
　そして目の前が真っ暗になった。

「熱っつ！ここどこぉ!?」
　気づいた時には火山に囲まれた暗い、いや黒いところにいた。空も、火山も、火山から出ているマグマも、その辺の草木も、城っぽい建物も、何もかも黒い。そして熱い。多分周りにある火山のせいだと思う。
　今まで取った水分が全部出るぐらいの大量の汗が、私の額を流れた。その汗が、周りが熱いから出ているのか、この場所の雰囲気に怖気づいた冷や汗なのか、私には分からなかった。
「おっ！来たねっ。キミが影川依夢かい？」
「へ!?えっと、誰…ですか？」
　突然、私の目の前に、コウモリみたいな形の白い翼の生えた少年らしき人物が現れた。
「ボク？そうだなぁ。気軽にレイとでも呼んでよっ！」
「あぁそうそう。ボクの役割を言ってなかったね。ボクはキミの生活をできる限りサポートする、いわば召使いみたいな感じ。ここはキミの元々いた人間界とはぜーんぜん環境が違うから、適応するまでお手伝いするよ！」
「ちょっっと待って、ここ地球とかじゃない系？」
「まぁそういうことだねっ☆周り見て気づかなかったの？」
「やっぱり!?もう地球には戻れないの？スマホ見れないとか最悪すぎるんですけど!?」
「多分戻る方法はほぼないと言ってもいいんじゃないかなぁ。」
　え、やっば。人生終了のお知らせかもしれない。終わった。そんなの無理なんだけど。
「それより、『すまほ』って何だい？」
　レイ、スマホ知らないんだ。人間のことといろいろ知っていそうなのに…。
「あー！ｐｌａｙｉｎｇ　ｔａｂｌｅｔのことかぁ！スマホって呼んでるんだね。」
「ぷれいんぐたぶれっと…って言った？てか私なんも言ってないんだけど??」
「あ、ボク心の中の声が勝手に聞こえてくるんだっ。キミにとってその『スマホ』はそんなに大事なんだねぇ。」
「…そんなのこの世界では要らないよ。」
　ん？レイ、今いらないって言った？
　そのとき、目の前に突然、ものすごーく大きな狼男みたいなのが現れた。
「うわぁぁ!?こいつなんなの!?」
「ああ、これはウルフノイド。多くの敵を倒すためにつくられたやつだよっ。これでもボクたちの味方だから安心して！」
「ほんと？よかったぁ。こっちが倒されちゃうかと思ったよ。てかそんなことよりこれからどうすればいいのさ！」
「そうだねぇ。一応来てもらったからには何かさせなきゃだよねぇ…。よし！キミにはお手伝いから始めてもらうよっ！こっち来て！」
　そう言って、レイは瞬間移動でもしたのかってぐらいすぐに遠くの城へ行っちゃった。私じゃ追いつけないんだけど。あきらめてゆっくり行くか。
　どれくらい歩いたか分からなかった。最初のころより、周りがすごく暑く感じる。でも、全くのども渇かないし、疲れたような感覚もほとんどない。それに、汗とかも全く出ない。普通なら倒れるくらいの高温なのに。
　気づいたら城の前にいた。ほんとに記憶がない。でも、そこにレイがいて、ちょっとだけ安心した。
「やっと来た！遅いなぁキミは。」
「ごめんって。それで、ここで何すればいいの？」
「言ったでしょ？キミにはお手伝いをしてもらうって。だから、こ

このお城の主人さんの依頼を聞いてあげるのっ！とりあえず中に入ろっか！」
「はぁ…。」
　中は、外の暗さとは対照的にすごく明るかった。でも、雰囲気は何となく暗い、黒い感じがした。
「おや。来てくれましたか。」
　そこにいたのは、ちょっと前に会った狼男を綺麗にしたみたいなイケメンの獣人だった。一目見て（この人は優しそうだな）と思って安心した。
「私はヴェルア・カルティッドと申します。今から少しの間、よろしくお願いいたします。」
「ぁあ、えっと、か…影川依夢……です。よ…よろしく…お願いします…。」
「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。それではついてきてください。」
　言われるがままについていくと、地下室のさらに深くに来た。後ろを振り向くと、レイがいなくなっていた。そしてそこは、とても広い図書室だった。
「あなたにはここの掃除や片づけをしていただこうと思います。私は少し忙しいのでね。わからないことがあったら、そこにある装置で連絡してくださいね。それでは頑張ってください。」
　なーんだ。ただ掃除するだけか。楽勝じゃん。
　そう思って本を持とうとした。けど、「おっっっも!?」私じゃ到底持てないぐらい重かった。見た目はうっすい一冊の本なのに、どうやっても持ち上げられない。おかしいって！なんで？
「やっぱりそうなると思ったよ。キミ、魔力ないもんねっ」
「レイ！いたの？」
「ま、とりあえずちょっとぐらい魔力を分けてあげるよ！えいっ！」
　その瞬間、私をひどい頭痛とめまいが襲った。それと同時に体も熱く感じて、倒れてしまった。
　目が覚めたのはそのちょっと後だったと思う。
「おーい！何をしてるんだい？今はお手伝いしてるんだよ。早く起きてっ！」
「あぁ…ごめん。って痛っ！」
「この調子じゃ慣れるまでに時間がかかりそうだねっ。がんばって！」
　うるさいな…今それどころじゃないんだよ。なんだかレイが少し憎らしく思えてきた。とっととこの世界から出たい。でも、今は私に力なんてない。従うしかないんだよなぁ…。
　頑張って重い体を起こして本を持ってみた。
「かっっっる！」
　おかしい。この本は本当にさっきまでとてつもなく重かった本なの？でも、これなら余裕で何冊でも運べる！
　私は二十冊ぐらい同時に持って一気に運んだりして、すぐに仕事を終わらせた。
「ありがとうございます。助かりましたよ。」
「こちらこそいい経験になりました！ありがとうございました！」
「そうですか。そういえば、あなた地球の方から来たのでしょう？地球に帰りたいですか？」
　突然の質問に私は一瞬体が固まったかと思った。え？帰れるの？帰れるなら帰りたいけど…。
「なんだか今にも帰りたいって言ってそうな顔してますね。」
「どんな顔なんですかそれ。」
「地球に帰るためにはそこにいる少年みたいにとても多くの魔力が必要です。ですが、今のあなたではその魔力を抱えきれません。頑張って修行してくださいね。」
　え～…。すぐに帰れるかと思って期待しちゃったじゃん。てか、レ

イってそんなに強かったんだ。でも、一刻も早く帰るためには、たくさん修行して魔力に慣れていく必要があるってことだよね。こうなったら地球に帰れるように猛スピードで魔力つけてやるんだから！

「レイ！次にやることは何!?今すぐやりたいから早めにお願い！」

「も～。そんなに焦らなくても大丈夫だよ。今の魔力で瞬間移動ぐらいならできるはずだよ！次の目的地はここだよ。ちゃんとこの地図のここ見ていないと、違うところに飛んじゃうから気を付けて来るんだよ。じゃあねっ！」

レイはまた瞬間移動して消えた。地図には☆がついていた。それに、瞬間移動のやり方も書いてある。

〈最初のうちは、この地図にある目的地をしっかりと見ること。慣れてきたなら、頭の中で地図のその場所をイメージしてもよい。〉

見るだけで行けるの？そう思ってじっと☆を見るとすぐに周りの景色が変わった。

「おっ！やっぱり使えるようになってるね。見たところけがはなさそうだし、次行くよっ！」

「えっ…あっうん！でも…ちょっと待って…。」

いやけががなかったとしても！瞬間移動したせいなのか、めまいと吐き気が急に襲ってきたんですけどぉ！こんな副作用が出るなんて聞いてないよ…。

少し症状が落ち着いてから辺りを見まわした。周りの色が今までの黒とは変わって一面赤になった。赤なのに、さっきよりは涼しく感じる。でも、普通の人間だったら耐えられないのかなと何となく思った。

「そろそろ行ってもいいっ？時間もあんまりないかもだし。」

「そうだね。早く次行こ！」

レイに連れていかれたのは、洞窟みたいな場所だった。暗い洞窟。でも、暗い空間にはもう慣れたから先が見えないほどではない。レイはどんどん奥まで進んでいく。

少し歩くと、変なものが見えた上に変なにおいもした。そこには、焼き鳥と栓抜きっぽい落書きが上下左右にびっしり描いてあって、周りには巻貝や和菓子（？）もたくさん落ちている。不気味だったしものすごく怖かった。

そして、洞窟の少し広い、かなり奥のほうまで来た。

「次は、ここにあるお宝を持ち主のところに届けるんだ。」

「え？お宝なんてどこにあるの？この周りには見当たらないけど…。」

「まさかキミ、お宝が見えるところにあると思ってるの？そんなわけないじゃん。見えるところにあったら誰でも盗めちゃうよ。」

「それは分かったけど、どうやって探すの？」

「大丈夫。持ち主から暗号だけもらったから、暗号を解いて探そう！」

そう言って取り出した紙には意味が分からない文章が書いてあった。

〈〈暗号を解く鍵は洞窟の道のりにあり〉〉『たかやきらせんは、らくやきせんまきろせんまきじめやきんせんのわたせんにあり。』

一見、全く意味が分からない。でも、ヒントはさっき来た道にあるってことでしょ？

その瞬間、さっき見た不気味な場所を思い出した。そこにあったものは確か、

「やきとり」「せんぬき」「らくがき」「まきがい」「わがし」だから……？

そういえば、よくあるネットのテストに「やきとり」で「やき」を文から「取る」っていうのあったな……。あ！もしかして全部考えてみたら…！

「やきとり」は「やき」を「取る」。「せんぬき」は「せん」を「抜く」。「らくがき」は「らく」が「き」になる。「まきがい」は「まき」が「い」

になる。「わがし」は「わ」が「し」になるってことね！あとはこれを全部当てはめて…！
「レイ！解けたよ！」
「お！解けたの？早いねぇ。日本語は勉強したつもりなのにボクにはさっぱりだったや。」「答えは、『たからは、きいろいじめんのしたにあり。』だから…そこの正方形になってる黄色い地面の下にあるんだ！早速掘ろうよ！」
「おお～っ。こんなよくわかんない暗号よく解けたね。やっぱり日本語は日本人に任せよっと。はい！これスコップだよっ。」
スコップを受け取って掘り進めると、宝箱らしきものが出てきた。持ってみるとすごく重い。
「よしっ！後はこれを持ち主のところに届けるだけだね。がんばろっ！」
「えぇ？これ一人で運ばなきゃいけないの？今持ってるだけでしんどいのに…。」
「ま、魔力を扱うにはそれなりの体力も必要だし、その体力をつけるためだと思って！」
こうして何とか運び終えて、持ち主さんにものすごく感謝されて二つ目の修行？が終わった。

その次の日から、地球に帰るための、少し謎の修行の日々が始まった。
ものすごく大きな岩を（だいたい）百キロメートルくらい運ばされたり、魔力回復薬とかの実験台になったり、すっごく分厚い本を読んで内容を要約させられたり…。ひどいときには凶悪らしい大きなドラゴン？を倒すためにウルフノイドと協力することになったな。まぁ、その時は戦いたくなかったから、仕方なーくいろいろ勉強して無理やり和解して解決したような気がするんだけど…。
でも、そうやって修行をクリアすればするだけ、魔力？の力もついてきている気がする。前は地図を見なきゃできなかった瞬間移動も、何も見ずに使えるようになったし吐き気とかもなくなった。その上、回復魔法やらビーム的なやつやらたっくさんの魔法みたいなやつも使えるようになった。多分、修行で手に入れた体力と、その都度魔力をくれて、少しずつそれに慣らしてくれたレイのおかげなんだろう。

そんな修行を繰り返して体感で五か月たったところだった。
「キミ、随分力つけたよね～。ボクこんなに魔力強くなるって思ってなかったや。」
「そんなに？でも、自分でもなんか強くなってる感覚はあるかも。」
「…そろそろお別れの時になっちゃうかもね。」
「え？なんで？」
「……キミをここに連れてきたときに使った、あのワープ魔法を教えてあげるよ。」
そこで気づいた。私、こんな短い期間でこんなに強くなってたんだ。てっきり、ちょっと強くなったけどまだ敵わないぐらいだと思ってたのに…。レイと同じぐらいの魔力になるまで、ここまで努力してたんだ。もう、こんなに…。
そう思っている間にも、レイから魔力と魔法の使い方が脳に直接送られてくるのを感じた。
「ボク、最初に言ったでしょっ？なんだっけ、あの…Ｐｌａｙｉｎｇｔａｂｌｅｔ？あ、スマホか。それのこと要らないって。その理由、今なら多分わかるよねっ。」
「え？」
「キミの記憶からとかボクが知ってる限り、その『スマホ』はものすごーく便利で、知らないことはすぐ分かるし楽しいこともいっぱいあるんだよねっ。ここに来る前、キミは『それ』に夢中になってた…

いや、依存してた。それ以外のことに興味を持たずに、自分が出来るはずである上にやるべきこともせずに、それのことばっかり考えてたんだよね。」
「うっ…確かに言われてみれば…めっちゃスマホ依存症だって言われてたような……。」
「でもこの世界でキミは、『それ』がなくたって色々できたじゃんか。努力して何でもできるように、強くなっていったじゃんか。それはなんでだと思うっ？」
「えっ……と、『帰りたい』っていう願望？目標？があったから…かなぁ？」
「うん！そうだねっ。キミは、一回立てた目標のためなら、どんなことでもぜーんぶ頑張れる。努力できる。その長所、見逃してなかったっ？」
そう言われた瞬間、今までの私の行動がよみがえってきた。
小さい頃は元気で、よく公園とかで遊んではしゃぎまくってた、明るい女の子だった。でも、最近は友達をつくることさえ、勉強することさえ面倒くさがってやらなかった。やろうとしなかった。気づいたらスマホしか見ないみたいな、廃人みたいな感じになってた。
でも、この世界で気づけた。私は、目標に向かって努力することができる。当たり前かもしれないけど、ずっとやらずに過ごしてきたなんてもったいないじゃん！って今は思う。そう思うと、なんか勉強だってできちゃいそうだな。気分もずっと暗かったような気がするけど、明るくなれた気がするかも！
「そろそろ、魔法も使えるようになったんじゃないかな？……ほんとにお別れだねっ。」
「え!?うそでしょ、早くない!?」
「だいじょーぶ！キミはもう、ボクがいなくたってできるんだから！地球に帰ったら魔法はもう使えないけど、キミならできる、乗り越えられるはずだよっ！まぁ、ちょっと寂しいかもしれないけど…。がんばって！」
「…！わかった。私なりに努力して変わって見せるんだから。またね！…また会えるかわかんないけど。」
そう言って、私は魔法を使った。今度は地面から円柱状の光が出てきて私を包み込んだ。転送されるまで少し動けない時間があったけど、私はその間ずっとレイに笑顔を向けていた。

戻った時にスマホの時計を見たら、あの日のあの時間のままだった。でも、記憶は隅から隅まで残っている。あれが夢だったのか、現実だったのかは分からないけど、スマホの画面はサイトが見つからないエラー画面を示していた。
その次の日から、私はなるべく嫌だと思っていたことも頑張るようにしてみた。嫌いだった勉強だって、教科書とワークの解説を何度も読んで理解するようにした。そうやってコツコツしたら、ずっと十～二十点台だったテストで六十～八十点ぐらいとれるようになった。なるべく周りの人と話すようにしてみたら、最初は少し気味悪がられたけど、共通の推しとかの話題ができるようになって仲良くする友達もできた。
なんだ、私できるじゃん。小さな目標を少しずつ達成していくことから始めれば、今までできなかったことだってできちゃうんだな。スマホから離れるなんて無理だと思ってたのに。いや、『無理だ』っていう思いから離れたから、今こうやっていろいろできてるんだろうな。
よし決めた。私、絶対に「目標と努力」だけは忘れない！私にできること、一生懸命やってやるんだから！人生なんてまだまだいっぱいあるはず。これから起こることは分からないけど、なんだか楽しいものになる予感がした。
〈終〉